

東日本大震災と私(1)

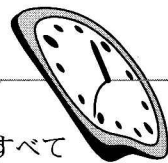
植田医院 植田 俊郎

プロローグ

被災後2ヶ月を経過した5月11日午後2時46分、地震発生時刻に合わせ、やっと回復した防災サイレンが鳴った。救護所のある大槌町寺野弓道場の避難所で起立し手を合わせ黙祷した。思わず眼が潤んだ。

平成23年3月11日、地震後に発生した巨大津波は我が町を駆け上るように襲い、市街地のほぼ全域が瓦礫の町と化した。私が当日午後の診療中に体験した地震は、これまでに体験したことがない揺れであり長く続く揺れであった。町が騒然としている中、医院近くでおばあちゃんが倒れているという報が入った。私は連絡してきた女性の車に同乗し、スタッフも器材を抱え小走りで現場に駆けつけてくれた。幸い症状は軽く同じ女性の車で避難所への搬送を託し、徒歩で医院に戻ることにした。途中避難を躊躇するご近所の老女を避難する車を止めて乗せたりして医院玄関前に帰ってきた。そのとき医院周りを点検していた妻が「水が見える。」と言うのである。「まさか津波なんて。」と思いながら隣の農協職員、社会福祉協議会職員と共に階段を登った。そして途中自宅4階の窓から見た景色は、白い空間が広がっているばかりで何が起きているか分からなかった。しかし危険を感じ屋上まで達したときに見た周囲の状況は、まさに忽然と海の中に立っている我が医院であった。黒い波が渦を巻き、瓦礫、家が沖へ流れていく光景は悪夢のようであった。そして第二波と思われる黒い帯状の波が押し寄せてきた時に母がつぶやいた。「私達だめかもしれない・・・。」と。幸いにして津波は屋上までには達することはなかった。4階も無事であったためここで一夜を過ごし、翌日の3月12日自衛隊のヘリコプターに救出されこの避難所に降り立ったのだった。

すぐに私の医療活動が始まった。医療行為というよりは、患者さんの状態に合わせた搬送先を決めるのが初動であった。私自身も同日夕方には2名の血液透析患者に付き添い、ヘリコプターで青森三沢に搬送。三沢市立病院を経て、八戸日赤病院に無事収容することができた。同病院のご好意で当直室に泊めていただき翌13日早朝タクシーで大槌に帰った

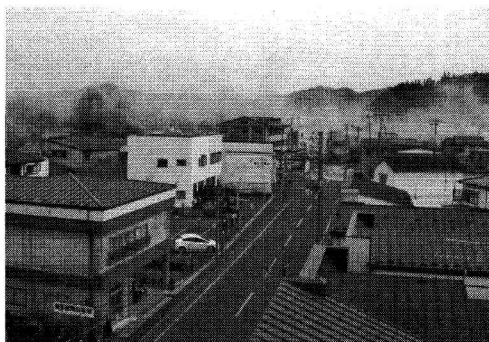


のだが、この時点での大槌の医療体制は県立大槌病院、5名の開業医、調剤薬局はすべて被災し診療投薬不能であった。また近隣の医療体制についても全く情報が入らず、まさに大槌は孤立した状態にあった。そして私はこの後約2ヶ月半にわたる救護所での医療活動と避難所生活を送ることになるのである。

記録

▶ 3月11日(金)：被災当日

4階屋上からの惨状を目の前にし、皆言葉少なげであった。私達家族3名、従業員5名、農協職員8名、社協職員2名の計18名がこの屋上に取り残されていた。いつの間にか夕闇が迫り風と雪がちらつき始めた。このため津波被害を免れた4階の和室（6畳と8畳の続き間）に全員で移動した。この階は家族の寝室、風呂、トイレがある空間で、布団、毛布等の寝具、また衣類も充分にあった。さらにこの階には山道具を入れている小さな部屋があり、ガラストープ、ガソリNSTOOP、コッフェル類、テント、山用の食糧等があり心強かった。その他、ホワイトディのために用意したクッキーやチョコレートもあった。水が引いた3階のダイニングキッチンからはジュース、ヨーグルト、カップ麺、お餅などを回収できた。残念ながら水の確保はできなかったが、ひっくり返った冷蔵庫の中から氷を取り出し、これをやかんにかけてお湯も作ることができた。水が少ないだけで2日間程度はこの家で過ごすことができると考えた。山でのビバーク(緊急露營)を考えれば、これほど贅沢な環境はないからだ。和室の窓からは末広町方面の火災が見えたが、我が家まで火が迫ってくるような感じはない。私達夫婦は和室前の廊下にソファを移動し毛布をかぶりな



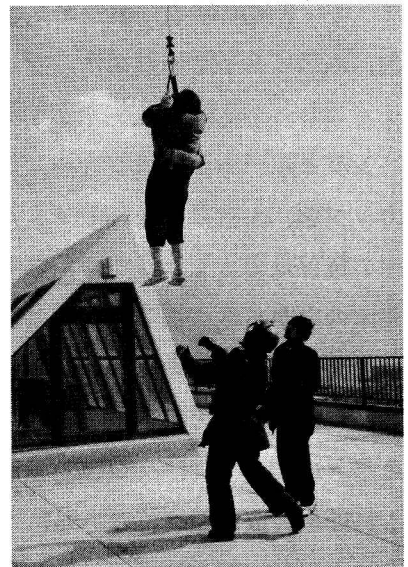
ながら餅を焼いたり、お湯を作ったりした。私はすでに山登りの装備を身に付けており、下着から冬山仕様である。皆もダウンジャケット、コート、雨具、ウインドブレーカーなど適当に身に付けている。寒くはなさそうだ。何も怖くはない。「生きてやる。」と思った。

▶3月12日(土)：救出の日

静かな朝を迎えた。この朝の屋上からの光景は忘れられない。町が消失していた。あたかも湖面に瓦礫が散在しているようである。末広町と上町方面の火災も続いていた。そんな中、瓦礫の中を歩いている自衛隊員を見ることができた。すでに救助の手が到着しているのである。夜が明けるにつれヘリコプターが飛び回るようになった。消火活動の大型ヘリも飛んでいる。9:30頃から我が家の周囲にもヘリコプターが接近し、消防署、役場周辺でのピックアップを含めた救助が始まっていた。10:32 我が家の屋上に航空自衛隊員が降下してきた。農協職員の若者が隊員に声をかけられ救助活動に協力することになった。最初に吊り上げられたのは母であった。

結局2機のヘリコプターによって全員無事に寺野ふれあい運動公園野球場に降り立ち、寺野弓道場避難所に収容された。各地からの被災者で避難所はごった返していた。私の手元にあるのは往診鞆の中の血圧計、聴診器、血液ガスモニター、必要最小の各種救急薬品と消毒薬、包帯などしかなかった。そしてAEDが1台であった。

この震災の大きな特徴は津波被害の過酷さにある。生きているか、死んでいるか、なのである。私自身この避難所で救命処置とか外傷の処置とかをしたわけではない。この避難所では治療できない疾患、生活できないであろう方々を適当な施設に紹介搬送しただけである。特に妊婦さん、透析患者さんの搬送にはヘリコプターが大活躍であった。この夕方、私も透析患者さんに付き添いヘリで三沢へ飛んでいる。(前述)



- ◆以上3月12日までの大まかな記録です。
八戸から帰った3月13日からはメモを付けており、後日まとめる予定ですが少し時間がかかりそうです。